

共感的ネット利用度と共感力との関係性

Relationship between Sympathizing with Others by Internet Use and Empathy

◎上東 伸洋¹, 阿部 弘樹¹, 坂部 創一¹, 山崎 秀夫²
Nobuhiro UEHIGASHI, Hiroki ABE, Soichi SAKABE and Hideo YAMAZAKI

¹創価大学大学院工学研究科 Soka University Graduate school of engineering
²常葉大学健康プロデュース学科 Faculty of Health Promotional Sciences Tokoha University

Abstract : We set up the theoretical hypothesis that communication on social network service (SNS) in internet environment improves empathy, real human relations and quality of life (QOL) into a chain reaction. It was investigated and analyzed statistically based on questionnaire surveys of university students in the information sciences, and the hypothesis was analyzed by the structural equation model. The results appeared to verify our hypothesis, and the empathy with communicating on SNS gave real human relations and QOL stronger improvement effects, in comparison with adverse effects on them of SNS tired and Techno-Internet addiction disorder tendency. Moreover, it was suggested that empathy in the real world can be improved by empathy on the Internet.

キーワード : 共感力, 共感的ネット利用度, テクノ・ネット依存症傾向, 人間関係, QOL

1. はじめに

近年, より良い人間関係を築いていくことができる能力であると思われる共感力はビジネスや医療, 教育分野等において注目されており, 様々な場面における共感力の重要性が指摘されている。この共感力を向上させる要因として SNS 交流度との関係性を示唆した研究があり, 共感力や QOL (Quality of Life) に対し, SNS 交流度が正の効果を与えていることが報告されている¹⁾²⁾。そこで本稿では, さらなる向上効果が期待されるより純化した向上要素として, SNS 交流にも含まれる共感的な交流に特化した共感的ネット利用度を想定し, モデルを再構築し, 下記の負の要素も含めた仮説検証用の因果推定モデルにおいて, このネット利用度が共感力や QOL を向上させる有意な関係性が示されるかを総合的に分析する。負の側面とは, 共感力や QOL の低下が予測される共感的ネット利用度に伴う SNS 疲れやテクノ・ネット依存症傾向のことを指す。なお, 共感的ネット利用度の定義は先行研究³⁾より「メールや SNS で双方の感情を共有すること」とする。

2. 研究の方法

(1) 研究の手順

ネット共感力・現実共感力・共感的ネット利用度・現実人間関係良好度・QOL の関係についての理論仮説を設定し, それを検証するため作業仮説を設定する。その作業仮説にもとづいて, 調査票の構成と作成を行い, 調査を行う。この調査データを使用して, 相関分析, 多変量解析(因子分析・主成分分析・共分散構造分析)を統計ソフトの SAS と Amos の連携的使用で行い, 仮説を検証した。

(2) 理論仮説の設定

本研究における理論仮説は, 「共感的ネット利用度が高い学生ほど, ネット共感力が高く, それが現実共感力と現実友人関係さらには QOL 向上へと連鎖的な正の関係性を示す」である。本調査で用いた WHOQOL 尺度における QOL の定義は, 「個人が生活する文化や価値観の中で, 目標や期待, 基準または関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」であり, 調査項目は心身や種々の環境への満足度及び生きる活力や楽しさの程度等, 生活全般の質を問うものとなっている⁴⁾。また, ネット及び現実共感力の定義と上記の仮説の根拠を以下に記述する。

共感力においては応用分野が広いこともあり, 種々の定

義が存在し統一的に確立された定義はなく, 研究者が分析の目的に応じて定義しているのが現状である。共感とは他者の心理状態へ意識を向けることに始まり, 推測・判断の結果何かしらの情緒的経験へ至るまでの一連の過程と捉えることができる⁵⁾。このことから, 共感力において, まず共感しようとする意識が重要であり, その意識が共感力を高める基底になると考えられる。これらを考慮し, 本研究では共感力を「他者の心理状態に意識を向け, その情動を理解し共有する能力」と定義した。なお, 共感する主な場면을対面での対話機会が多い現実生活の場とインターネット上を想定し, 共感力のうち前者を現実共感力, 後者をネット共感力と区分した。また, 本研究では前述した共感力定義の動機・認知・情動の三要素の視点から分析するために, その三要素に対応した 3 つの下位尺度「共感動機」(共感しようとする力), 「認知的共感力」(他者感情を理解できる力), 「情動的共感力」(他者感情を感じる力)から構成された「共感力スケール(EAS: Empathic Ability Scale)」を参考にした⁶⁾。この尺度は現実生活を想定しているため, 現実版の簡易尺度を作成後に, それに対応したネット版尺度を作成した。二種類だと調査項目が倍になるため, 前回の尺度開発の分析結果をもとに下位尺度に大きな影響力を示す類似項目を一項目に統合するなどして, 上記三種類の下位尺度から構成される簡易版の現実共感力尺度を構成した。

次に共感的ネット利用度とネット共感力及びその 3 つの下位尺度において想定される関係性について述べる。まず共感的ネット利用度とネット認知的共感力の関係性として, 動作や言動を模倣することが相手の気持ちを理解することにつながり, 共感力を高める要因になることから⁷⁾, SNS 上における模倣行為としては, 情報の拡散行為である Twitter のリツイート機能などが考えられる。また, SNS・メール上の情報や他者とのやり取りから相手の近況や考えを知ることができ, LINE の多種多様なスタンプ機能(感情表現イラスト利用)等の充実した共感機能により, 共感者は相手に容易に共感を示すことができる。これらや, 文章による共感的返信がネット認知的共感力に寄与していると想定される。次に, ネット情動的共感力に関しては, 共感力研究が他者の苦しみや悩みに寄り添い癒すカウンセリング研究にも応用された経緯から, 調査項目も悩みや苦

しみへの共感力を問うものとなっている。他者の情動状態を共有するためには、相手の表情や仕草などの非言語コミュニケーションによる情報が大きな要因であり、現実でよく交流する相手ならまだ想像しやすいが、SNS 上の交流はネット上のみ友人や遠くにいる友人との交流も含まれているため、これらを考慮すると共感的ネット利用度がネット情動的共感力に与える直接的な影響は小さいと推測される。しかし、近年悩み相談 SNS や友人間の LINE やメールでの相談等も気軽に利用できる環境にあることから、情動的側面も分析の対象とする。ネット共感動機との関係性については、ネットの普及により現実での交流時間よりネット上での交流時間の割合の方が高い友人や知人も存在すると考えられる。それら交流においてネット上の交流で相手を理解しようと、交流を持続させていこうとすれば、ネット共感動機への促進効果が想定できる。次に、ネット共感力と現実共感力において想定される関係性について考察する。先行研究にネット上での利他的な情報発信を意味するネット利他が、現実における利他的行為へと波及する効果を検証した研究例がある⁸⁾。この他者を益するために情報発信の行為を行うネット利他には、他者を励ます行為も含まれることから、苦しむ他者への共感が潜在的に含まれていると考えられ、共感力にもネットから現実へと波及効果があると想定した。さらに、SNS を利用する目的として「家族や友人・知人とのコミュニケーションを図るために利用する」と回答した人の割合が高いことが報告されており⁹⁾、このことから、共感的ネット利用度がネット共感力も介しながら現実の共感力や友人関係、QOL を良好にしていると考えられる。また、現実共感力が高く相手の気持ちを理解し共有できる人は、現実におけるコミュニケーションを円滑にし、他者とより良い関係を築いていくことができると思われ、現実共感力が現実の友人関係を良好にし、QOL も連鎖的に向上することが想定される。

一方で、共感的ネット利用度が高い学生ほどそれに関わる情報機器の利用時間も長く、SNS 疲れやネット依存症傾向が危惧される。また、今回の調査対象は工学部情報系の大学生のため、ネット利用を伴わない PC によるプログラミング等のオフライン使用の間に、気分転換等で適時オンラインでのネット利用も多く見受けられ、主に PC の過剰利用を対象としたテクノ依存症、またスマートフォンとの併用によるネット依存症傾向の悪化も考えられる。ネット上の交流による疲れや PC・インターネットへの過剰依存が及ぼす、現実共感力や現実友人関係良好度、QOL への悪影響が懸念される。しかし、本調査と類似の調査対象での先行研究では、共感的要素も一部含まれていると考えられる SNS 活用度がそれに伴うテクノ依存症傾向を考慮しても、友人関係良好度と QOL をやや向上させていることが報告されている¹⁰⁾。そのため本分析において、前述した負の要素を含めても、現実共感力や現実友人関係良好度、QOL に対する影響は、共感的ネット利用度からの共感力がもたらす向上効果のほうがやや強いと思われる。なお、SNS 疲れ、テクノ・ネット依存症傾向の定義は、前者を「SNS の過剰利用に伴う精神的・身体的疲労や、自身の発言に対する反応を過剰に気にしたり、知人の発言に返答することに義務感を感じたりするなどの症状」、後者を「パソコンあるいはインターネットへの依存度が高いこと」とした。

(3) 作業仮説の設定

前述した理論仮説を検証するために、複数の構成概念を提示し、それぞれに観察可能な調査項目群を作業仮説として設定した。この構成概念が、理論仮説で設定した関係性を示すかどうかを検証することになる。PC 利用では、オフラインとオンラインとは SNS 利用時に切り替えられ、これ

表 1 調査項目一覧 (各構成概念)

項目番号	(現実共感力)	(総合化のための第一主成分固有ベクトル)	
1	相手が何をしてほしいかが察知できる方だ		0.35
2	人の気持ちに敏感である方だ		0.35
3	相手の様子やしぐさから、相手の感情や気持ちを読み取れる方だ		0.35
4*	周りの人たちが悩んだり苦しんだりしていても気にならない		0.23
5*	周りで問題が発生していても、自分に直接関係しなければ気にしない		0.26
6*	気持ちが沈んでいる人を見て、自分はどうか感じるということもない		0.27
7	人付き合いでは相手の気持ちをよく考えるようにしている		0.39
8	人々の感情や気持ちを理解しようと心がけている		0.41
9	他者の態度や表情に気を付けるようにしている		0.34
(ネット共感力)			
1	ネット上(パソコン、スマホやタブレット)でのやり取りで、相手が何をしてほしいかが察知できる方だ		0.42
2	ネット上で相手の感情の変化に敏感である方だ		0.48
3	ネット上で相手の感情や気持ちを読み取れる方だ		0.47
4*	ネット上でまわりの人たちが悩んだり苦しんでいる投稿があっても気にならない		0.12
5*	ネット上で不幸な出来事の記事や投稿があっても、自分に直接関係しなければ気にしない		0.10
6*	ネット上で気持ちが沈んでいる投稿を見ても自分はどうか感じるということもない		0.07
7	ネット上で相手の気持ちをよく考えるようにしている		0.36
8	ネット上で感情や気持ちを理解しようと心がけている		0.38
9	ネット上で他人の投稿やコメントに気を付けるようにしている		0.29
(共感的ネット利用度)			
1	メールや SNS (LINE, Twitter, Facebook 等) で勇気付けたり励ましたりすることがある		0.55
2	メールや SNS で悩みや思いを共有することがある		0.60
3	メールや SNS で苦楽を共有することがある		0.58
(SNS 疲れ)			
1	SNS 上で友人と交流して精神的疲労を感じることもある		0.48
2	SNS 上で周囲の反応がないと不安に感じる		0.50
3	SNS 上で反応(コメントやいいね等)することに義務を感じて疲れる		0.53
4	SNS の使用後に身体的疲労(目が疲れる、睡眠不足等)を感じることもある		0.48
(テクノ・ネット依存症傾向)			
1	パソコンをよく活用する(パソコンゲームを含む)		0.19
2	パソコンは好きである(パソコンゲームを含む)		0.22
3	パソコンの前二座るとほっとする		0.26
4	パソコン作業に没頭して時間を忘れて、ほかの用事を忘れてたりすることがある		0.25
5	イエスノーかをはっきり言わない人にイライラする		0.07
6	話をするときは結論を早く言ってほしい		0.04
7	自分に無駄なことにエネルギーを使いたくない		0.11
8	パソコンや人の反応が遅いとイライラする		0.12
9	長時間パソコン作業をした時は周囲の状況をすぐに把握できない		0.16
10	パソコン作業の後もなかなかパソコンのことが頭から離れない		0.24
11	パソコン作業中に話しかけられたりすると腹が立つ		0.20
12	ネット上(パソコン、スマホやタブレット)だけの友人の数が現実生活の友人より多い		0.18
13	ネット上での交流の方が現実生活での人と交流よりも楽しい		0.19
14	ネット上で実名や素性を知らない友人が多い		0.19
15	ネットに夢中になっていると感じることがある		0.25
16	ネットで充足感を得るために、より多くの時間を費やす必要を感じることもある		0.28
17	ネットの使用時間をコントロールしようとして何度も努力し、失敗した経験がある		0.27
18	ネットの使用をやめようとしたとき、気分が落ち着かなかったり、意気消沈することがある		0.30
19	予定よりも長時間、オンラインの状態が続くことがある		0.27
20	仕事、大学などにおける大切な人間関係を、ネットが原因でなくしてしまいそうになったことがある		0.15
21	過度なネットの利用を隠すため、家族や友人に嘘をつくことがある		0.23
22	現実逃避や、不快感(無力感、罪悪感、心配、抑うつなど)から逃れる目的でネットを使うことがある		0.25
(現実友人関係良好度)			
1	現実世界において、喜びや苦しみ共有できる友人に恵まれている		0.49
2	現実世界において、側にいてリラックスできる友達が多い方だ		0.53
3	現実世界でよく対話をする		0.46
4	現実生活での友人は多い方だ		0.51
(WHOQOL)			
身体的関連 6 項目、心理的関連 7 項目、社会的関連 3 項目、環境的関連 8 項目、項目の計 24 項目			

注) 固有ベクトルは、構成概念ごとの総合点(第一主成分得点)算出係数を示す。

は繰り返し循環することもあり、後述する図 1 のパス図では、テクノ依存症傾向とネット依存症傾向の両尺度得点を合計したものをテクノ・ネット依存症傾向として設定している。なお、依存症であるかどうかは、専門医の面接診療で最終判断されるので、本稿ではこの尺度値が高くなることをテクノ・ネット依存症傾向と表現する。QOL⁴⁾、テクノ依存症傾向¹¹⁾、ネット依存症傾向¹²⁾、現実友人関係良好度²⁾

は先行研究に準じた調査項目を設定した。また、共感的ネット利用度、SNS 疲れは定義をもとに調査項目を作成した。これらの構成概念の信頼性と妥当性を各種検証したうえで分析を行った。各構成概念に対して設定した具体的な調査項目は、表 1 に示すとおりである。また WHOQOL とは WHO が開発した QOL の指標で、今後の QOL のグローバルスタンダードの候補でもあり、種々の生活要素への満足度等から構成されている⁴⁾。

(4) 調査の方法

以上の仮説に基づき、表 1 に示す項目で調査票を設計し、2016 年 11 月 16 日～12 月 1 日に休憩時間等を利用し調査を行った。このデータで信頼性・妥当性を検証した後に仮説を検証した。調査対象は、日頃オン・オフラインを含めた情報環境に接することが多い A 大学の工学部情報系大学生を対象とした。その内訳は、有効回答数は 261 人（母集団：346 人、回収率 75%）であった。質問形式は 5 段階評定法（最低 1 点、最高 5 点）であり、基本的に「あてはまらない～あてはまる」の中から選択する形式をとった。なお、共感的ネット利用度・SNS 疲れ・ネット依存症傾向の 3 項目は、「少ない～多い」の 5 段階評定法である。また、各調査項目は、原則として得点が高い人ほど各構成概念が高位であることを示すように設定した。しかし、回答のしやすさを考慮して、一部問の方向性を逆にしてある項目があるが、分析時には得点を逆変換した。

3. 結果と考察

(1) 信頼性・妥当性の検証結果

作業仮説で設定した複数の調査項目でグルーピングされている構成概念に関する尺度の因子的構成概念の妥当性と信頼性の検証手順を以下に示す。因子分析は、因子間に相関がみられるので斜交回転を適用した。全ての調査項目で因子分析すると、QOL、テクノ・ネット依存症傾向、現実共感力、ネット共感力は、複数の下位尺度から構成される広範囲の尺度のため、この中の項目が部分的に他の構成概念の因子構成項目とも強く関連することで複数の因子に重複して分類されるケースも生じる。そこで、QOL・テクノ依存症傾向・ネット依存症傾向の尺度は既に信頼性と妥当性が検証され独立した尺度として使用されているので、因子分析から除外した。現実共感力、ネット共感力尺度は、尺度として適用できるかどうかを各構成概念ごとに検証した（表 2, 3）。最後に、複数の下位尺度から構成されない構成概念に関する調査項目データのみで、因子分析した（表 4）。上記のデータに対して、事前の構成概念の数を抽出する因子数に設定して因子分析を行った結果、それぞれ想定した構成概念と同一の因子が抽出された。その結果は、表 2～4 に示す。この表から各因子間に振り分けられた調査項目の因子負荷量が全て 0.3 以上となり、因子的構成概念の妥当性が検証された。信頼性は、内的整合性（Cronbach の α 係数）を用いて検証し、表 2～4 において各因子の α 係数は全て 0.7 以上であり、信頼性に問題が無いことが分かる。

(2) 共分散構造分析による因果推定モデル

データの妥当性と信頼性が検証されたため、共分散構造分析を適用し、因果推定モデルを作成する。その参考資料として使用するために、まず相関分析を行った。この分析を行うために各構成概念を総合化した。総合化するには、次元性の根拠ともなる各構成概念の因子的構成概念の妥当性と信頼性が検証されている必要があるが、3. (1) より検証済みである。総合化の方法には、単純加算と主成分分析による第一主成分得点の二種類があるが、後者を適用した。その理由は、各変数間の相関関係が強い変数ほどウェイトが高く総合値の精度が向上するからである。なお、第一主成分が総合的な主成分であるかどうかは、第一主成

表 2 現実共感力構成項目の因子分析結果

因子番号	項目番号	調査項目内容	因子負荷量	因子名 固有値 α 係数	固有ベクトル
(1)	2	人の気持ちに敏感である方だ	0.88	現実認知的 共感力 2.37 0.87	0.58
	3	相手の様子やしぐさから、相手の感情や気持ちを読み取れる方だ	0.80		
	1	相手が何をしてほしいかが察知できる方だ	0.77		
(2)	5*	周りで問題が発生していても、自分に直接関係しなければ気にしない	0.85	現実情動的 共感力 2.16 0.81	0.59
	6*	気持ちが沈んでいる人を見て、自分はどうか感じるということもない	0.77		
	4*	周りの人たちが悩んだり苦しんだりしていても気にならない	0.67		
(3)	8	人々の気持ちを理解しようと心がけている	0.93	現実 共感動機 2.26 0.83	0.61
	7	人付き合いでは相手の気持ちをよく考えるようにしている	0.76		
	9	他者の態度や表情に気を付けるようにしている	0.65		

注) *がある項目は得点と項目内容を逆方向に変換している。全体の α 係数は 0.83 である。固有ベクトルは、尺度の総合点（第一主成分得点）算出用の係数である。

表 3 ネット共感力構成項目の因子分析結果

因子番号	項目番号	調査項目内容	因子負荷量	因子名 固有値 α 係数	固有ベクトル
(1)	2	ネット上で相手の感情の変化に敏感である方だ	0.97	ネット 認知的 共感力 2.50 0.90	0.60
	3	ネット上で相手の感情や気持ちを読み取れる方だ	0.84		
	1	ネット上で相手のやり取りで、相手が何をしてほしいかが察知できる方だ	0.80		
(2)	6*	ネット上で気持ちが沈んでいる投稿を見ても自分はどうか感じるということもない	0.85	ネット 情動的 共感力 2.16 0.80	0.60
	5*	ネット上で不幸な出来事の記事や投稿があっても、自分に直接関係しなければ気にしない	0.77		
	4*	ネット上でまわりの人たちが悩んだり苦しんでいる投稿があっても気にならない	0.67		
(3)	8	ネット上で相手の気持ちを理解しようと心がけている	0.92	ネット 共感動機 2.16 0.80	0.61
	7	ネット上で相手の気持ちをよく考えるようにしている	0.74		
	9	ネット上で他人の投稿やコメントに気を付けるようにしている	0.64		

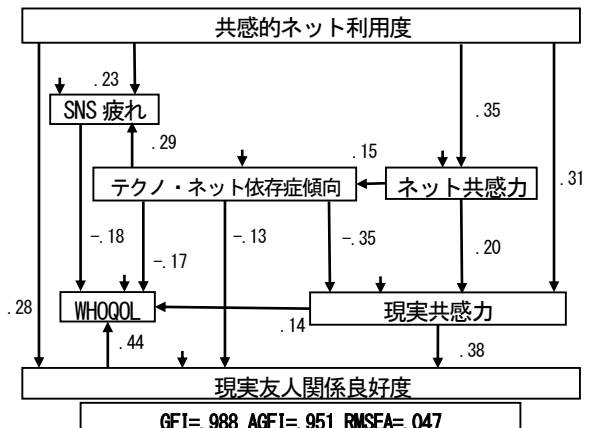
注) *がある項目は得点と項目内容を逆方向に変換している。全体の α 係数は 0.70 である。固有ベクトルは、尺度の総合点（第一主成分得点）算出用の係数である。

表 4 各構成項目の因子分析結果

因子番号	項目番号	調査項目内容	因子負荷量	因子名 固有値 α 係数
(1)	2	メールや SNS で悩みや思いを共有することがある	0.99	共感的 ネット利用 2.49 0.90
	3	メールや SNS で苦楽を共有することがある	0.88	
	1	メールや SNS (LINE, Twitter, Facebook 等) で勇気付けたり励ましたりすることがある	0.72	
(2)	3	SNS 上で反応(コメントやいいね等)することに義務感を感じて疲れる	0.79	SNS 疲れ 2.22 0.73
	2	SNS 上で反応がないと不安に感じる	0.60	
	4	SNS の使用後に身体的疲労(目が腫れる、睡眠不足等)を感じることもある	0.58	
	1	SNS 上で友人と交流していて精神的疲労を感じることもある	0.57	
(3)	3	よく対話をする	0.91	現実友人 関係良好度 2.80 0.86
	4	現実生活での友人は多い方だ	0.79	
	2	喜びや苦しみを共有できる友人に恵まれている	0.76	
	1	側においてリラックスできる友人は多い	0.62	

注) 固有ベクトルは、尺度全体の総合点（第一主成分得点）算出用の係数である。

分得点を求めるための固有ベクトルが全て正の値であるかどうかで判断した。その結果、該当の係数は全て正の値を示した。その得点算定のための固有ベクトルは表 1 に示している。構成概念間の相関関係から、各構成概念の共変関係の程度が把握できるが、因果関係の方向性は分析できない。そこで共分散構造分析を適用して、各構成概念間での相関係数を参考にしながら、因果の方向性を論理的に考慮し、分析用に用いたソフト (Amos) の総当たり機能も併用しつつ複数の候補モデルを作成した。作成したモデルは、仮説以外の考えられる因果経路も設定した多数のモデルから、適合度指標やモデル選択指標、モデル解釈の合理性を総合的に判断して選択し、最終的なモデルを確定した。なお、構成概念とその構成要素数が多いため、構成概念を観測変数として扱い、そのデータは前述の第一主成分得点を適用した。図 1 に因果推定モデルとそのパス (因果関係



注) 誤差変数は1のみで示し、パス係数は全て.05以下で有意であり少数点前の0は省略している。適合度基準はGFIとAGFIが0.9以上でRMSEAが0.05以下とした。

図1 共分散構造分析による因果推定モデル

を示す矢印) 係数を示した。図1の下部に示すGFI, AGFI, RMSEAの値からモデルの適合度は良好であると判断できる。しかし、図1には直接的な因果の係数が示されているが、間接的な効果は明示されていない。そこで、該当の要因に直接向かう因果的係数(パス係数)効果に、他の要因を経由する間接効果も含めた総合効果(図2)も含めて仮説を検証していく。

図1から、理論仮説における共感的ネット利用度からネット共感力、現実共感力、現実友人関係良好度、QOLを連鎖的に向上させる直接的な有意な関係性が示されている。この関係性を順に詳しく考察してみる。共感的ネット利用度からネット共感力への直接的な正の関係性は、ネット上における共感的な交流によってネット共感力が高まる可能性を意味する。さらに、共感的ネット利用度からネット共感力を經由し、現実共感力へと向かう間接的な正の連鎖的關係性や、共感的ネット利用度から現実共感力へ直接的な正の関係性も見られた。前者の関係性は、ネット上の交流には現実における交流相手と一致しない場合も含まれるため、その交流を持続させようとする努力がネット共感力を向上させ、さらに現実共感力向上へと連鎖的に波及する関係性を示したと考えられる。後者の関係性は、ネット上と現実生活における交流相手が重複する場合であると考えられる。これは、ネット上において現実で対面する機会の多い相手の近況等を知り、共感することで、現実共感力が高められていると思われる。次に、ネット共感力と現実共感力の関係性について着目する。ネット共感力から現実共感力へ直接的な正の関係性が見られた。これは、ネット上での共感力が高い人ほど現実共感力も高いことを示している。また、現実共感力は現実友人関係良好度への正の直接的な高い関連性が見られ、友人関係における共感力の重要性が示唆される形となった。さらに共感的ネット利用度から現実友人関係良好度への直接的な正の関係性が見られ、ネット上での交流が対面する機会の多い人との紐帯を強めることが示唆された。一方、過度な共感的ネット利用度はSNS疲れやネット共感力を經由してテクノ・ネット依存症傾向を悪化させ、現実生活における対人との交流時間が減少することで現実友人関係良好度やQOLを低下させる間接的な負の関係性も見られた。特に、今回の調査ではネット共感力を經由したテクノ・ネット依存症傾向の悪影響が大きく、図2からネット共感力がQOLに与える総合効果は正負の効果相殺されてほぼ0となっている。このことから、ネット共感力が高まるとネット上の交流が増えることによりネットやPC等に依存してしまい、QOL向上を妨げる要因となる可能性が示唆された。しかし、本結果ではSNS

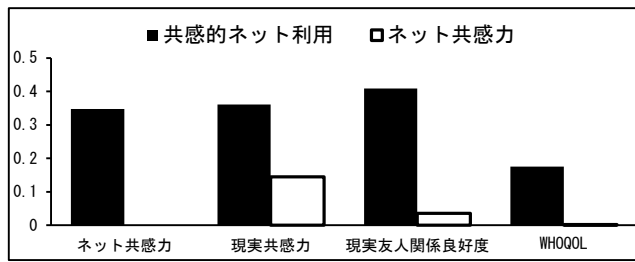


図2 共感的ネット利用度とネット共感力が各構成概念に及ぼす標準化総合効果比較

疲れやネット共感力を經由したテクノ・ネット依存症傾向の悪影響を考慮しても共感的ネット利用度がQOLに与える総合効果は、0.18を示しており(図2)、QOLを向上させる結果となった。これは、先行研究におけるSNS交流度がQOLに与える効果よりも高い値を示しており、メールやSNS等で交流する際には現実の人間関係をベースにした共感的な交流を意識することが重要であることが示唆された。

4. おわりに

仮説「共感的ネット利用度が高い学生ほど、ネット共感力が高く、それが現実共感力と現実友人関係さらにQOL向上へと連鎖的な正の関係性を示す」は、図1のモデル全体が基準を満たす良好な適合度を満たし、さらに上記仮説の因果的關係性に該当するモデル内におけるパス係数の統計的有意性が示されたことから検証された。また、共感的ネット利用度が、先行研究におけるSNS交流度よりも現実共感力やQOLに与える制の効果が大きいことから、メールやSNS等で交流する際には現実の人間関係をベースにした共感的な交流を意識することが重要であることが示唆された。今後は、共感力をより向上させるネット利用法の調査を継続しながら、複数の大学でのケーススタディを積み重ね、さらに縦断調査で一般化に至るかどうかを検証していきたい。

参考文献

- 1) 上東伸洋・北上大樹・坂部創一・山崎秀夫(2016) .SNS交流と共感力の関係性.2016年社会情報学会(SSD)学会大会 研究発表論文集.
- 2) 上東伸洋・坂部創一・山崎秀夫(2016) .SNS交流と共感力の関係性.環境情報科学術研究論文集.No30, pp.273-278.
- 3) 北上大樹・上東伸洋・坂部創一・山崎秀夫(2016) .共感的ネット利用と心理的レジリエンスとの関係性.2016年社会情報学会(SSD)学会大会 研究発表論文集.
- 4) 田崎美代子・中根允文(1997) WHOQOL 短縮版とその手引き.金子書房東京, pp.33.
- 5) 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子(2000) 多次元共感尺度作成の試み.名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, pp.269-279.
- 6) 前村奈央佳(2009) 共感力と異文化態度との関係性—ゲーミング・シミュレーション実験による検討^{1,2}—, *Journal of Intercultural Communication*, No. 12, pp. 64-84.
- 7) 有田秀穂(2009) 共感する脳:他人の気持ちが読めなくなった現代人, PHP 新書, 京都, pp. 26.
- 8) 乾貴史・坂部創一・山崎秀夫・守田孝恵(2011) インターネット環境における利他的な情報発信がQOLに与える影響. 環境情報科学科論文集, 25, pp. 449-454.
- 9) 渋谷明子・志岐裕子・李光鍋(2011) SNS利用者のコミュニケーションとテレビ視聴—ウェブモニター調査(2011年2月)の報告(2)—.メディア・コミュニケーション:慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所紀要, 62, pp. 57-58.
- 10) 柴田雅雄・坂部創一・山崎秀夫・守田孝恵・張建国(2010), 良書の読書とCMCが文章と口語の主観的な表現力に与える影響. 環境情報科学論文集, 24, pp. 339-344.
- 11) 春日伸予・高橋明(1996) テクノストレス症候群的傾向の検査尺度用質問紙を用いたテクノストレスの自己管理. 心身医, 36(6), pp. 484-488.
- 12) キンバリー・S.ヤング(1998) インターネット中毒—まじめな警告です. 毎日新聞社, 東京.